国立国会図書館　タイトル『梅双紙』 請求記号 863-136

ガラス使用

梅双紙

梅双紙

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136

ガラス使用

少ら答るまゝ見えて母此あるしたらい
行人にあるべき文化来のとし
居士の七と也弔ふ今日なり也主
無とでもさまたに志きたる所あるの
自ひあるる涙の嫌ともなりてしらい

三人よりうち拾ひ刺しし
梅双紙あるる共上所き作善な
也いあるる梅正なるい同じ夏の夏四月
そうなきと居さるよかりし人と
たるとのとく集めて盃なの拾ひ

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

青蒲居士遺唫

封きれは唱そむ都とよ花の文
[illegible]ぬ[illegible]てこの言れたる仏地を里
業一種家にすぎる[illegible]
[illegible]に[illegible]

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

辞世

蓮の葉に
葉の世をしたり

いまをうりし青蒲の日を
風をいさなひ例の
笑墅にあらそふ夜の木と
なりや跡て他人の
志らさまなるを

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』 請求記号 863-136
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136

ガラス使用

さらひ笠かけ恋をもとり
大原の里なる青蒲安胡の両子を
早ゆるはせちにまさてすをさらひ
やし朝夕むつゝ侍りけれ
きれ無しや先実をむさふ梅樓　闌更
野の原になれし里のみしら夜　青蒲
市の屋に合きて牛に鞍打て　一匊
油とし里に彌たとけり　一馬
そ後くと月の出る海町さつき　花一

霞もち以さく葉末なるゝ人　鳥東
柿賣のすゝ所に山の伝先れ　扇旨
玉尾に余数積さけふとや　赤胡
ほしけに笑夏原か弓の青　馬
ゝのくとせて　せと呼ばれ　匊
赤ゝし麦積にけるゝ物　東
橋の蒙侍の出来様ひけり　旨

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136

ガラス使用

追福服起之俳諧

青蒲居士

ほとゝ[illegible]二の[illegible]請ようてあり

ワリ[illegible]余[illegible]みしら夜の月　梅所

[illegible]のそれにも掉をさしそへる　剣二

[illegible]をとる中くに[illegible]　霞鉞

[illegible]の[illegible]　麹舟

[illegible]の餅[illegible]も[illegible]　茅麿

帯とる紙にも嬉し麻たての子　赤南

中くらしり芥子のちりも　呆冥

[illegible]もたれしたるち此年の人全[illegible]　一鬼

古一順

梅の月　梅まてくれたまへの月　闌更

梅かゝ香に人の来ぬとて嬉しけれ　樗良

梅黒とに禅引きるあるしだ　蕪村

昔ほの日やおろかるけしく　梅花　播磨　青蘿

いとともせてうし梅かちにゆるゝ　暁臺

ひり宿も梅の世なるに浮まらだ　白居

走ちり戸に傘立かけて梅折ぬ　上扇　似鳩

あそふ日も世の中よりれ月と梅　童厚

うめか香や殿とまりれた梅一木　恒麿

東の風清夜ゝ梅かゝにせむるだ　行脚　亳化

卧や梅塊白ふいきをひそ、　一匊

月も日も古きも此あし梅花　羅城

ひふの生活あらまし跡て梅の月　五明

梅ちるや怠うちにとし男　春鴻

とりとゝ見えて旬ふてゐなく梅薫る　鳥明
こまめか書やいつこ史　草か菜木畑　士朗
梅の蒼黒の人としゆるゝけり　上刕　素輪
楳の香やいせの皇一か公とりし　武刕　雪江
志ら妻の記ゝまゐるり　下川原　騏道
月の梅つれ来きおとゝ文かけり　田山
釣ことゝ背しゝ日本ゝや梅薫　白斗

梅か香や和らく風のかしらより　楚寶
横にきて蕪もいてけり梅の月　斗入
旬ひ深し袖にちりも月の梅　武刕　一馬
聖の梅乃ちるまゝハ人にきれ　乙周
松ありて陰もりら給　尚の梅　江戸　貞松
梅の戸やとゝ見ましけ給うとゝのしれ　亜白
梅ちるや万無にすかれ小寺筑　雪萬

もいてと待てう梅の木に　ふ夜ゟ事　大江丸

うめの香の香所て花にまとるべし　岱青

宿の梅とし家来よく　鳩の鳴　柳荘

咲と見し夜ハ稀なるに梅の事　宣啓

むと青の月香に似たる梅見せ　蓼太

左義長の午時ゟ有れや梅に梅　眉山

御俳もふるや　室のうめの花　無説

とふしての梅ゟ生れて又五衰　得雨

人にもの野ふ　新なに里の梅　白雄

偏しきの宿へ帰ましも梅　無　桂五

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136

ガラス使用

ちまもをぬ人目とおしき梅花　壺半
燭をくゝ梅の門たゝ月　夜ゟ　笑魚
蟠蟠の卵や比るゝめの急　奇渕
暮るとも　鶯の花にきり梅花　加賀　麻なを

四郎兵をいたゝち梅を　菓兆
ましなゝやうハま所をを梅かけ　蘭皐
よきしのさしきなれや梅花　素楽
あけぬのや口の梅あるハ月の梅　京　定雅
咲うつる志し梅なく月のなる　旭波
梅咲うす拝咲しを人の来る　加賀　としを
うそのなゝしまゝたり月と梅　蒼虬

まつり梅やあしたの雪をとらしも　童岡
鷹しの雪をあるる梅　笠　三津人
走る梅や猶をとんとも　信の家　市麗
不はしたる走はるは梅花　鹿太
曇る日の雪をとんへて梅をとし　午心
咲たちて月も洩さしめのむ　伊勢　翠川
眠るまで欲をもたれし梅旬ふ　太節

野夜さは梅をまひ寒の枕ぶ　雉啄
山越こす様の春　現く戸口寒　仙臺　文卿
巣雀の家と梅の枝ハこゝろてぬを　和水
ゑまれ折の手梅をまし　やはの月　白水
まちしし門の野日の梅花　越後　左雲
よさおしの春の走まりや梅　信州　吐丈
昼夏して学ぶ来るの鳥の梅　摂州　呉光

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

まゝ風にし碓にふれたる梅葉る　筑波　道隣
梅かゝまゝにとゝかゝしたるを稲光を　蕉雨
人はとりもてけるや梅を　百池
梅かゝまゝや花に夜の面あかを　伊勢　月恒
三日月にかよそ見梅ハ家かゝまんり　茶彦
灯火のうつれハまゝし梅を　雲蛙
見えらゆるうちに咲れり叢の梅　南甫

梅折も蛇にふれてのきたるを　以明
春ふかし梅の世さらハ　長崎　菊也
春もまゝ梅にさゆれうめの花　玉屑
梅かゝまゝに橋麦とゝく野宇ゝ　雲ゝ
宇宮の花人なるかゝ白ふ亀し　阿波　柳涯
家しにはゝゆるもしも梅はさゝ　伊勢　省我
鹿もしらや去年程さく梅を　漫ゝ

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

梅の香や山を見れば家もあり　越坂　二江
森と家とはなしにしき社出所ぞ　相模　暮玖
うゐ〻所の月の輪まとり　梅笠　乙二
ちがとてゝ咲とてあり　梅集　春夕
梅さらやいまるめしき北庫の角　井梧
うゝ枝ハ人のもれも　鶯の梅　菅根女
梅ちるゝ利休の雪階を紀さむる　栞年

梅の木れあるゝ蔵もせぬ山家ぞ　一茶
梅ゝ香や竜の陳子の建をしも　砂川
蔵の梅大なる吹ゝ　砂道
きつゝさ社寺梅ゝ入覚ぞ　近江　亜溪
字めゝ香の風に吹ゝ　眠り方　五渡
梅雪や寒てゝのとへる雪の穴　寥松
梅ゝ枝に傘到れけり　梅ゝ杲　淇貞

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

さつ呉る雪衣梅ゆり月の梅　朝水
小坊主社あとのしるや梅　笠　亀山
うらはすハ来ほとも梅ハ咲まゝり　秀之
杉葉葉て散しろうるや梅の雪　雨塘
梅すれたえとて梅の新らし枕　相模　叙来
四五輪の梅を波くしよるし雀　雲帯
梅白ふ日五ほのなさ日なるなら　筑前　蓮何

魚たのりあちるな笠家の日かけ梅　常倖　百美
二階から目素さほや梅花　竹齋
梅罠や浪もまのしさ青月夜　魯水
裏罠や梅ゝ亀ふ夜もすから　旬竹
一のはしこの橋からハ梅の月　薩只　関叟
棋をしゝやとしくふへる壁の穴　椿堂
笠も香をもつや梅咲田の窪と　爐扇

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

有明の霧をとしかつ梅ぞ　筑前　里芝女

梅か香や窓にうけきん蓑をれし　星布尼

を傑ハ見せてるものか梅ぞ　桃花

立よしたかけやかるらん月の梅　可都里

しらちるや浮かへる雨の味　江戸　鷺雪

出てこれを主さいものか梅の梅　勇水

ふしめや明るほて夜にもとりゆく　既飽

梅折たさやしらしらるる小藪か本　浪花　万和

出さりしたれ梅あるまきん梅花　桂山

一ツ家の先に梅ぞ明るる里　勇雪

似て家に似て年寄に梅ぞ　川猛　来曾

和梅に世界屋をしし小杉姫　南部　東芽

梅の月梅をたれ本の所にけり　一岱

しめかき也雪ハ夜中の背しかし　葛三

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

梅をうゑや獨を結んでしかり事し　麥太
白ふとき大きく見れば梅花　越後　路丈
いとしくに同ふたちるか罵の梅　臼峯
草鹿の先にも白ひを梅笠　杲冥
正月をまち得し彭に梅の雪　二雲
梅をうゑや野のんぬ杜を知れ條　雪雄
日も余れと迄うりれ梅笠　風泉

うゑの笠ちりてもうつまに草履とる　篤老
瘦るなと笠の付る体　鄙梅か古　近江　申氣
いとに縛し月夜くそ新の梅　志く女
楳をうゑや俗洗ふ志ち面かよ仙　梅夫
梅の香を横木に寝るや唐の宮　ノ旦
山とり居て流るゝ水に梅ひらく　丈左
年無に折とおりへと梅笠　丹波　武陵

まのまゝ今のふるはしまゝ梅に留　巣也
軒の梅月に夜明のうぐひす　虎杖
梅よ梅　腥花といふ法なし　近江　芳之
家毎尺あとへ引ゝや梅花　阜池
満月の金りもをしめ梅家　朴哉
とゝ却るまゝや山邊の墓の梅　古國
梅のこゝ殺そのよ後こひるなめあるゝ　武刃　こゝ女

この中にいく夜宿かん梅　河波　葦泊
梅の香に是ゝし所や明屑　可良久
うめさゝや小鳥に猫の笑ハるゝ　射毛
出ゝいゝろや垣ゝの梅の咲かゝに　菊岱
走ゝ梅のまゝにあ梅をちらしけり　浪花　瑞馬
折枝や笠に入るゝある梅花　三河　秋峯
ひとれ到し枝も芽にもよ梅の事　朝山

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

雪の梅目にみるやうなり白しらぬ　羅月　信

日のうけや梅にとつ日詰めて度る　五翁

殆しくなりぬ梅ちれ梅の中　蚊牛

菜やにハ唄をとるふゝ梅旬ふ　是六　江戸

走らしめや折れ鶴の来らしく家　玉珂

春はいつ梅さくまゝに走らしかし　如毛

山里や梅うり府ぬくうゝ鹿　無々

さきふるしの梅洗人　羽の旬　鳴麿　近江

梅咲や下結かよこさぬ背戸の川　芦菴　江戸

あるときも梅に来鳴や深山鴨　土竜

朝なく梅さうぬ日ハなかつ見ぬ　岳軺

夜や明る庭の梅花蒼ゝ　可久

鳥さへとの茶ゝしめの茶　鶴鳴　伊勢

正月ハ茶にかゝるし　梅花　有斐

山星ハ野しく梅の曇り始　于當
美り梅ハやなほ寒しく来ぬり　詠帰
い稀むるハ夜ゝ寒ぬ人ゝ梅花　意校
志し梅や葉を厚し折手焚き　京　岱李
くめの花　仙なよしは鄙見ゝは　梅壽
石梅やゆしけまむきふ恒のつま　一丁
梅の香風ナリ乃うて見えやさん　馬年

五六輪之し千紀梅の蒼ど　月居
おそしく那まゝへ梅の月　豊坂　葵亭
鶯の追ふ梅の月夜ど　兎月
けふまでハちしりもきん梅花　對竹
きしくと日の春くりり田家の梅　志塩
かくおもてこそうしぬ梅ど　笛露
くめの香や田水とよこは鶯ども　下野　官鯉

和歌に鳥鶯を見たる梅にたぐ　雄尾
ふめる風る木下　北ちや梅花　路白
梅に幸て出る正月の梅をしし　大和　馮月
あらはれ梅に月東に京ハ何　其堂
をしまれや木廿月　北面の梅に浮　胡準
梅に東に浮る雀も良に多　劔二
余所の梅　梅にハそふ兵の有に　一思

梅の香の中をあるや軒の山　碩布
しめりや世月をしらの藪　相模　九皐
たまゐらちいさられも梅花　冥々
面をアしに窓の梅をたゞ見ると　近江　可盈
小橋にて梅の下家とよられるや　馬江
出られた出る夜の出来て梅花　樗堂
走し梅や親に梅にうし酒娘ひ　くまも女

農休ともつくらや梅の小籬ゑら　南郡　谷雄
こめかまや牛の家へる東の果　武九
りさせとて赤く咲かぬ　梅茶　尺艾
山里やかな陳は梅の月　東苑
井の梅は風にも見ぬ匂ひさ　也好
今ぞおもはれしまものよ　梅老　豊後　月化
月暈や梅の小庭のうる木屐　成章

降くちも白さハかんは　梅花　浪花　井眉
おのかまに碎てちるのかこめの茶　一蕙
香ハ東は為かまし夜の梅　島之
山かけも梅ハ人をて花ときけり　一草
咲るなしとも咲はも　楳花　升六
梅なし春おもとなむ人の無事　山秀
梅さくらやハ分のうれ引まりら　亭徂

うめの香のひとりにもれて二日月　唫水
下京へよくれてりや梅を　常陸　藏六
人の来ぬ事にまして梅のまちこそ　一止
のくれ家の出らんでもてもも梅茶　乙麿
重ふても余来にならぬ梅の香　庵々麿
春の日は一時ゆく梅ゆくし　長翠
梅の香や藪に灯のもれ法輪寺　竹有

笑へある梅のことにの学家ぞ　澧水
相曳の一まけ生ゆる梅を　房召　其文
出をしらて暮進ゆる旬の梅、　艸史
ちる梅に折まかせ来る月夜の寺、　慮一
梅ゆくにも走らはや明家鴨　走け里
松風の耳にまちまちは梅を　柏翁
走る梅の香に惚れて咲日ぞ　完来

梅ちるや雌なしかちなるおさめ詩　常陸　義香
梅をるや目出度るをこれから　竹海
来るなしの雪の初音や梅匂ふ　白養
君が代の居ハ以ら節　梅　越后　石海
梅からや清戸の曙ひきしれぬ　素卿
ちり心清ちゃ皆ちる　梅　近江　千影
風のつてまつもをりくの奈良の梅　輪雪

梅ちるや稀なしはるもの　江戸　竹馬
こ女咲て粉なやらや　人　文素
梅か香や唐の星を明えたる　嵐黛
子のめら親のてくよ月と梅　桐栖
清く梅の手におされたる　百夜ぶ　備中　閑齋
香を奴らむ梅に陰の光ぶ　雨什
志ら梅や丁寧にちる山の寺　無角

恥しき枝をとゝれ宮の梅　宜麥
梅除し鶴に通さぬ田の向　右雄
山里や蔦のちりもうめの窓　尾張　五雄
ゆかしきや梅の月夜のうたひもの　一奠
梅ちるや翌是河原岐の紫折に　上総　輪之
落るや人もさゝらぬうらの梅　山行
紫畑とし長きもしきて梅殘日　黒明

梅ゝ長のこれかしきやうふき枝　京　土卵
人の肩かりても梅ハ折んやも　大きき岐
梅提て家尺の来たり梅花　僧　亜然
志のふみハおしらん梅こゝろ霄の人　羅佛
梅ちらん鳥の鳴ぬを照る紫陌
雪ゆる家詩の梅も咲まきり　魯隠
二月まで咲ぬ日ハ家し梅花　丘高

梅の香や背を向かうおとう佐し　玄耕
梅主なし馬の連れ乾門の人　春翠
月に深日に深　梅のふちひぢ　浪花　鷲雪
梅ちるや山の雀も知らぬ日　采蝶
梅ぬらし鄙ハかたらぬ家の飯　常倖　三省
仏より梅につかれ小寺ぢ　伊勢　宗悟
押かけ寄ふりの後し梅花　何分

童のこしかくたるや梅花　奥文
梅ちりつゝ又つしきを　洒うえを　五陵
牛も梅に月のこゝ酒や梅の香　田舟
人の家ハ寝ふるれども梅家　成美
梅柳梅よりなかゝらしれまを　鶏秀
雪の絆苔んでこされ梅家　長齋
梅咲てこちらの松も莫ぞ　湛竹

梅の月鼻うむをは嫌しいを　常悟　里石
やうやうの人はさつれて梅白し　道住
樵の秀は枕にうらし武藏を　京　空何
馬にかくもよく出来るし梅家　梅價
梅の香にあるうちをよふ日當ぬ　文秋
を傳の白は持られと梅家　越後　由朝留
あかまれさは竈をくも梅の香　護物

梅咲て雪のよくれの万へまける　下野　秀和
正月もはやうやう梅のきく　鷺白
猶来のよはかきんも樵に人　樵二
名梅にまうきて庵のとろう汁　千万里
枝をりにきたや雀に梅花　武君　素雲
梅うや餌さしのさつむ野のを　信君　信表
うめ咲て茶来洲しき垣根を　梨青

梅にまとひてなかつくれしきたるゐ　有隣
野の末をさむくまれ　梅巻　来彼
梅の月　人をさはらぬ人ハまれ　浦人
うめの香にまれつしやまなから　金令

辛未夏六月祀
先君墓　（白帝）
物換星移已七年誰考
孤帆満雲澗家門隠白
人猶慕身後聲名獨
自傳雨涯拜文生碧蘚

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

風收邱木簇叢烟香
醪奠羅手衫渡日落
遙岭響杜鵑
男　維德謹撰
玉峰爲則書

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136

ガラス使用

席も下駄も稲くさくなる　九
岩倉の祭の供にさそはれて　、
立ハ物ひきぞ安良との家　今
立さわぎ欅のまハ寄せのけ　、
菊つけ鮫買ふ銭が八文　九
北山ハ先つぬ一しくれ　、
庭のゆふ時雨の音のして　今

花ちりの頃酒かまくさや酔も　、
大黒柳のくれそら重　九
何もうも月に安治番菖蒲石　、
雲の出し夜をうちぬきや中ら　今
花のうかりもかくれ藤の袖　、
猪石をけそ山のかる情　、
夕虫の暁も手毎も法人とやる　九

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

僕らさの有る美濃の大恒　今
勢領によし田の笏をかまへさせ　丸
毛深まで　てるを　濃まえまりり　今
髪はやす風も立れし　宣良は　丸
よしある厨子をはらら姫もの　今
猪指の死うしなるやうしまて　丸
ひらしとくれし十三夜の夜　今

はしと鳴る鹿の屁おり身なしを　丸
焼らふ多らは　梨子を焼宿　今
新らし地神の書籍をひらしれ迚　丸
持る勢軍の貝の歩こゆる　今
寐せたとかさつくものは有る　丸
霞めて多をとりまた　板　鼻　今
ひふもまた緋屁のうしその屁をけて　丸

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

嵐の筆を数へ　晗　積　今
花の春押明るゝの名なりけり　丸
扇なるしこそ梅にむかはん　今

これ遠きへ今も大の追慕のよし母
あしはしいえと毎梅に向はん　此
あけ白天徒の手せけなるへし　此
はしかしはきむ侍ふまり紫て垂庵
にのきは数年にはなり勞且重今
金の笠かけ世志えて茅麿の
茅庵に早日のはしおもしれ

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136
ガラス使用

863
136

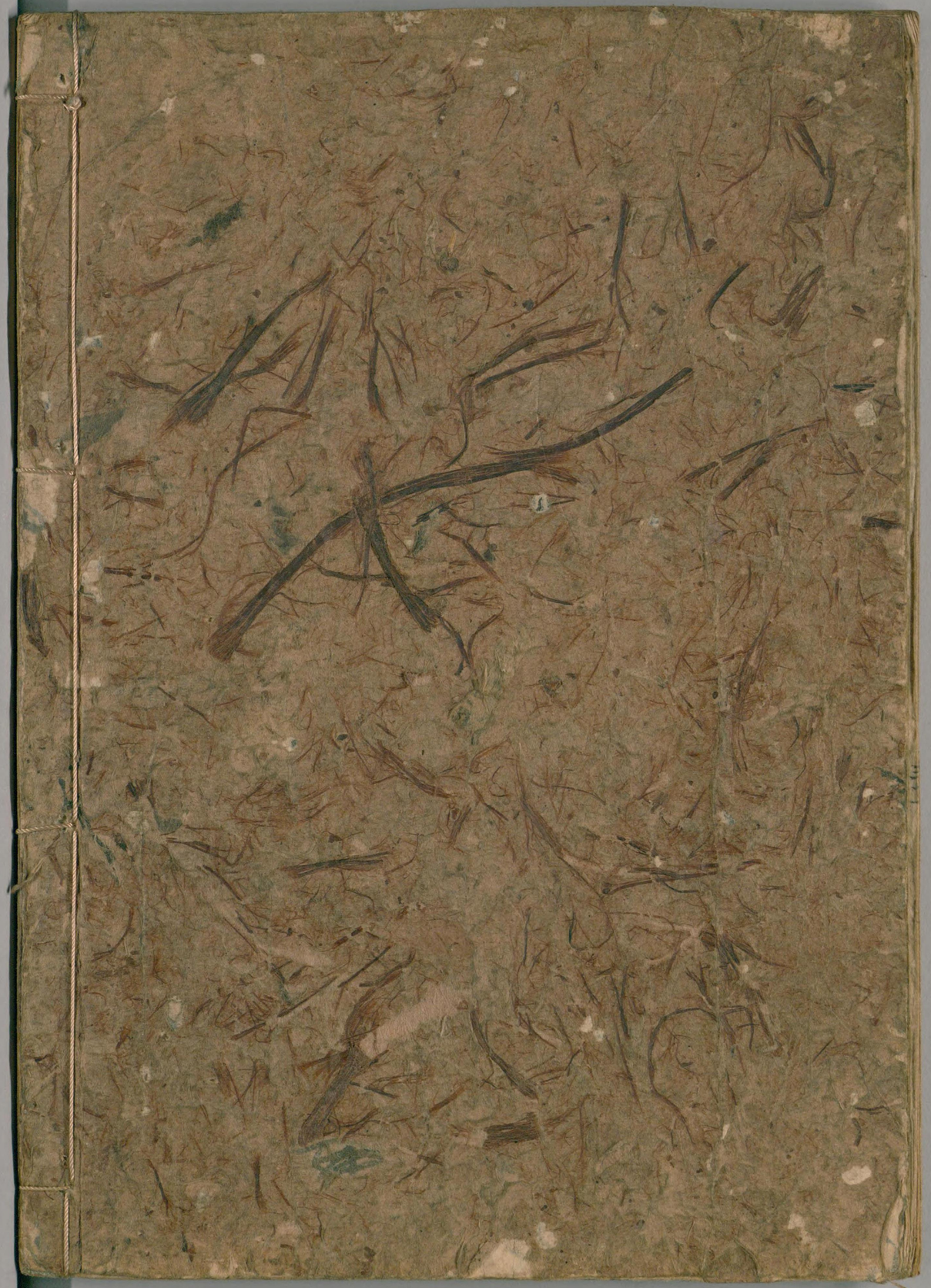
14185

文化十年酉七月十五日

應需 田喜 護物書之

国立国会図書館　タイトル『梅双紙』 請求記号 863-136

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『梅双紙』　請求記号 863-136

ガラス使用